

スラヴ語の擁護者からダルマティア生まれの教会博士へ
——15世紀アドリア海東岸におけるヒエロニウムス崇敬の戦略的受容——

砂田恭佑（大東文化大学、東京大学）

ks.tkb3594@gmail.com

「……かつて私は彼ら〔七十人訳ギリシア語聖書訳者〕の翻訳を入念に
改訂したうえで、私の言葉を話す人々に与えたものである。

“..... quorum translacionem emendatam olim mee lingue hominibus
dederim)”

ヒエロニウムス（347頃-420年）『詩篇（ヘブライ語）序文』

——「註釈：詩篇のスラヴ語への翻訳に関するもの」

——“nota: hoc de translacione psalterii in linguam Sclavonicam”

それに対するユーライ・スロヴィナツ（ca. 1355-1416）の欄外註

Tours, Bibliothèque municipale, Ms. 95, 14r.

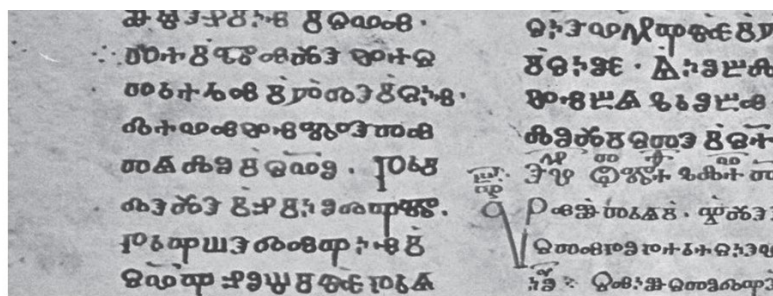
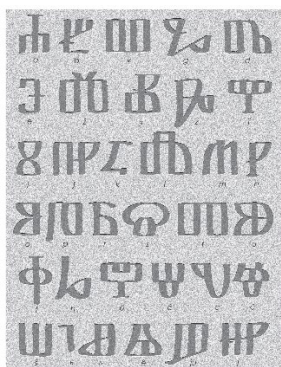
○ヒエロニウムスとスラヴ語世界

- ・ヒエロニウムス：著名なラテン教父。ラテン語『ウルガータ聖書』訳者
- ・347年頃「ダルマティアとパンノニアの双方に接する、ゴート人によって破壊されてしまったとある街」¹ストリドンに生まれ、ローマで文法、修辞を学ぶ。留学先のトリニアでキリスト教に回心。エルサレム巡礼へ向かう途上病に倒れながら奇跡的に助かったことをきっかけに、シリアの砂漠で修道生活を始める
- ・その後アンティオキアで司祭に叙階され、コンスタンティノポリス公会議（381年）のため集まっていた主教たち、とりわけナジアンゾスのグレゴリオスの知遇を得る。その後ローマに帰り司教（教皇）ダマススの秘書官として活躍するが、その死後トラブルなどもありローマから退去
- ・エジプトを中心に各地を巡ったのちベツレヘムに移住し、これ以降本格的に旧約聖書をヘブライ語から新たにラテン語訳するという事業に取り組む（のちのウルガータ聖書）。旧友を含む様々な相手と喧々諤々の論陣を張りながら、420年ベツレヘムで死去
→「スラヴ」との結びつけは言うまでもなくアナクロ。しかし「地元」アドリア海東岸を

¹ “[Hieronymus, patre Eusebio natus,] oppido Stridonis, quod a Gothis eversum, Dalmatiae quondam Pannoniaeque confinium fuit”. ヒエロニウムス『著名者列伝』135章（PL 23, 756）。

中心に、ヒエロニムスをスラヴ語に結び付ける伝説が広がっていく

・そもそも：中世のイストリア・ダルマティアはロマンス語系ダルマティア語話者とスラヴ系言語²話者が併存する状況。いくつかの修道院では典礼をスラヴ語で行っており、11世紀以降、キュリロス・メトディオス³の遺産を継承するブルガリアなどの正教圏が書法をキリル文字に切り替えた後も、アドリア海東岸ではグラゴル文字を典礼（ローマ典礼）で使用、スプリト司教座のもとカトリック圏にとどまる。この地域で用いられたグラゴル文字は角型（angular）と呼ばれる独特の変種的形状を持つ⁴



・9-10世紀には地方レベルで禁止令が出されたが途絶えることなく、1248年には教皇インノケンティウス4世がセニ司教フィリップに「ヒエロニムスから受け継いでいると主張する特殊な文字……に基づいて典礼を捧げる許可」を出す。最古の認可

→未だグラゴル文字スラヴ語典礼の創始者として権威を引き合いに出されるのみ。しかしこの後スラヴ語話者、スラヴ語聖書翻訳者とどんどん尾ひれがついていく

・14世紀にはこの伝説が修道院・聖職者以外にも広まる

→神聖ローマ皇帝・ボヘミア王カール4世（カレル1世）カール4世（在位1355-78）はナ・スロヴァネフ修道院を設立し（1347年）、ボヘミア（チェコ）系住民のためにグラゴル文字典礼を復興しようとしたが、この際ダルマティアの修道士たちを招聘。キュリロス

² スラヴ系言語、という煮え切らない用語を用いる理由は、9世紀から15世紀までの言語文化史を叙述する際に各言語（クロアチア語、ブルガリア語、等々）の名称を用いるのは困難であることによる。というのも、9-11世紀の時点でスラヴ系諸言語はいまだかなりの程度未分化であり、各言語の輪郭が顕わになってゆくのは11世紀以降であること（木村1985, 23）、当地の口語の発達とは別に古代教会スラヴ語が文語に影響を与え続けること、また11-15世紀のエスニシティ観念を現代のそれと混同することに大きな危険があることによる（たとえば中世クロアチア語と呼ぶと、クロアチアとダルマティアの一体性が何ら自明でない時代に現代の統一クロアチア理念を持ち込む危険性を冒すことになる。Fine 2006）。本レジュメでは、さらに簡単に「スラヴ語」と呼ぶこととするが、個々の文脈で言語としての性質は異なる。

³ 9世紀にモラヴィア侯の求めに応じビザンツ皇帝から派遣されたテッサロニケ生まれの兄弟で、グラゴル文字を創始して聖書と典礼書を翻訳し、宣教活動に従事したが、教皇寄りの姿勢をとる次代の侯により追放され、弟子たちがブルガリアに逃れ活動したことでそこでスラヴ・キリスト教文化が栄えることとなる。木村1985, 17-25。

⁴ 以下の図はそれぞれ、Verkholanstev 2014, 7 (fig.1: Croatian (Angular) Glagolitic alphabet) および13 (fig.2: Codex Assemanianus (11th c.), Vatican Library (Cod. Vat. Slav. 3), fol. 106v, fragment)。

及びメトディオスと並んでヒエロニウムスとサーザヴァ修道院創始者のプロコブが修道院の被奉獻者として崇敬された。明らかにスラヴ語典札と関連付け⁵

→ユーライ・スロヴィナツ Juraj Slovinač⁶ (ca. 1355-1416) : ブレジツェ (現スロヴェニア) に生まれ、ソルボンヌで学位を取得して自ら神学を講じ、トゥールの大聖堂付律修司祭として死去した人物。ヒエロニウムスの書簡 (『詩篇 (ヘブライ語) 序文』) の写本の、「自分の先行者 [七十人の翻訳者] たちに噛みついてからとって、私は彼らの訳などこき下ろされて当然と思っているわけではない。事実、かつて私は彼らの翻訳を入念に改訂したうえで、私の言葉を話す人々に与えたものである (Nec hoc dico quod precessores meos mordeam, aut quidquam de his arbitrer detrahendum, quorum translacionem emendatam olim mee lingue hominibus dederim)」という文言の脇の欄外に、「註釈: 詩篇のスラヴ語への翻訳に関するもの」(nota: hoc de translacione psalterii in linguam Sclavonicam)⁷と注記

⇒文字と典札に関する記憶。地方伝統を正当化する「スラヴ語の擁護者」としてのヒエロニウムス?

○15世紀における「ダルマティア人」聖ヒエロニウムス

・ダルマティア⁸では、11世紀以降、自治を志向し政治的一体性を欠く諸都市と、それを支配せんとするヴェネツィア、クロアチア王=ハンガリー王、ビザンツ帝国、内地勢力などが係争。14世紀後半の一時的なヴェネツィアの退潮を経て、15世紀初頭にヴェネツィアが支配を再確立して以降約300年間支配を継続。ドゥブロヴニク市=ラグーザ共和国のみが独立を保つ

・特にドゥブロヴニクは、ヴェネツィアに対抗しつつ内陸・東方諸地域と商業的つながりを維持し、かつ独立を守るという難しいかじ取りを迫られる

・諸都市の公用語はラテン語。口語としては、ヴェネツィアやナポリからの往来によりイタリア語が普及、またスラヴ系言語が浸透してダルマティア語は衰退

→典札言語は主にラテン語で、特定の修道院でのみスラヴ語典札が行われていたと推測

⁵ ボヘミア王による施策としてこれを見た場合の戦略性については石川 2021, 52-53 頁を参照のこと。

⁶ スラヴォニアのゲオルギウス、ジョルジュ・デクラヴォニ George d'Esclavonie とも。

⁷ Šanjek 1984, 7, Fine 1998, 103, Ivić 2016, 626. ヒエロニウムスの原文の訳は加藤 2018, 278 頁に拠った。写本は Tours, Bibliothèque municipale, Ms. 95, 14r (<https://portail.bibliissima.fr/fr/ark:/43093/mdata7212eb60b163f16170ebe4cd9f0df315d99c37d7>)。ラテン語の引用部分について、Šanjek は precessores を predecessores, dederim を dedi とするが、筆者が転写した仕方で書かれているように見えるので、そのように転写した。ご意見を賜りたい。

⁸ より正確に言えば、おおよそアドリア海東岸の細長い沿岸部、イストリア半島の付け根からコトル湾の手前までを指す名称で、本稿もこの用法に従う (地図参照)。現代では中央クロアチア、スラヴォニア、イストリア、ドゥブロヴニク (ラグーザ共和国として主権を持っていたためダルマティアとは別の扱い) とともにクロアチア共和国を構成する五つの歴史的地域となっている。

される。ただし上述の教皇の認可もあって 14・15 世紀はグラゴル文字典礼書の「黄金時代」⁹

・この状況でラグーザ共和国が、「ダルマティア人」聖ヒエロニウムス（イエロニム）の記念日（9月30日）を市の祝日に制定

○ラグーザ共和国政府によるヒエロニウムスの祭日の制定（1445年7月28日）¹⁰

* 解題

・史料：「緑書」（*Liber Viridis*）。ザダル条約によりドゥブロヴニクがラグーザ共和国として独立した 1358 年から、1460 年までの法令集で、以降は *Liber croceus* 「黄書」に収録される¹¹

・ラグーザ共和国の運営は、大評議会、小評議会、元老院によって行われていた。大評議会は二十歳を超えた成人男性が全員参加するもので、執行機関として元首（コムス→1358年以降総督）と十人の評議会員からなる小評議会があり、三十人から四十人の貴族が元老院を構成した

聖ヒエロニウムスの祭日が祝われるべきとの規定

上述の年（1445年）、7月28日に、九十七名の評議会員が出席した大評議会（*in maior<i> consilio*）¹²で、万人一致で以下の決議が採択された。即ち：

聖ヒエロニウムスの祭日を榮譽の意を込めて調査することで、〔それが〕何よりも優先して、私たち及び他のダルマティア人たち——彼は生まれにおいて彼らから出たものであった——により、その貢献に報いて崇敬され祝われるようになるべきことがふさわしい、なぜなら他の教会博士たちの中にあつて同聖人は多くの模範と〔正統〕教理（*exemplis et doctrinis*）に貢献することで神の武装した教会そのもの（*ipsam ecclesiam dei militantem*）をこの上ない榮譽でもって照らしたのだから——このことのためにあらゆる善き行いの褒賞者たる神はかの人の敬われるべき遺体をこの世界で多くの様々な奇跡でもってきらめかせ輝かせるのであるが¹³——、と私たちは考量するがゆえ¹⁴、まず私たちは毎年続けてその祭日、9月30日が、厳粛に崇敬され守られねばならず、結果として、私たちの支配権の及ぶ全域と同様私たちのラグーザにおいても、何人もかの祭典の日に手仕事と商売の何らもいかなる仕方でも敢えて大胆に為す

⁹ Šimić and Vela 2021, 122.

¹⁰ Nedeljković 1984, *Liber Viridis* 320, cap. 364.

¹¹ クレキッチ「日本語版への序文」4頁。

¹² 原文には *major* とあるが、例えば直前の第 363 条には *maiori* とあり、筆記者か校訂者のミスであると思われるため、挿入した。

¹³ 14 世紀の偽書『ヒエロニウムスの生涯と被遷』の影響。後述。

¹⁴ 原文は *illustravit* と *facit* のあとにそれぞれピリオドを打っているが、冒頭から *facit* までを冒頭三語目の *censentes* に支配される理由の分詞句と解釈する。

ことをしてはならないと、望み、判断し、規定する以上は、5イペルペル¹⁵の罰のもとに、私たちの共和政府の裁判官たちを通して、何であれこれに反することを行った者から、彼がこれに反することを行うたびに、没収するべきである。そこで実に罰金のうち三分の一が、もし続いて訴えによりその真実なることが明らかになったならば、訴えた者のものとなり、他の三分の一が私たち共和政府のものと、そして他の三分の一が裁判官たち自身のものとなるように。

・スラヴ語典札などへの言及はなく、むしろ生まれ (natio) としての「ダルマティア人」という範疇がそれに代わる

・中世後期にイタリアで発展したヒエロニムス崇敬の要素も窺える (後述)

→10年後の1455年には、ダルマティア中部にありヴェネツィアから派遣された総督に統治されていたトロギルでも同趣旨の法令が確認される¹⁶

「この上なく輝かしい〔教会〕博士、祝福されたヒエロニムス、神の普遍的教会に属する地の柱石 (Cardines orbi) [Iサム2:8] たる四名¹⁷のうちの一人…… (中略) ダルマティア人たちは、その地方から出生を得た (a quorum provincial originem habuit)、かのこの上なく祝福された聖人を何より崇敬するのがふさわしい……」

→1451年、ヴェネツィアのカステッロ地区に兄弟会 Scuola di San Giorgio degli Sclavoni が設立され、守護聖人の一人にヒエロニムスが挙げられる

☆造形美術による崇敬: ドゥブロヴニクのラゲーザ共和国大評議会堂の入り口に、ニコラ・ボジダレヴィチ (ca. 1460-1518) が造らせた枢機卿姿のヒエロニムスと洗礼者ヨハネの像があったという記録がある (1667年の地震で倒壊)¹⁸。トロギルにおける聖ロヴロ (ラウレンティウス) 大聖堂の洗礼堂に描かれた修道者姿のヒエロニムス (1460-7年作)。オルガンの扉にかけられた (?) ジェンティーレ・ベッリーニ (ca. 1429-1507) の絵画 (1489年作) では、ヒエロニムスが持っている本の開いた頁にグラゴル文字に似た擬似文字が描きこまれている¹⁹

・15世紀中盤に、自治を保つドゥブロヴニクとヴェネツィア領トロギルで、同じ「ダルマティア人」ヒエロニムスの祝日が導入されている

→①「ダルマティア人」の含意は？

¹⁵ イペルペル (iperperum) は、元々ビザンツ皇帝アレクシオス1世が導入した金貨ヒュペルピュロンに由来し、その価値が落ちて他の金貨にとってかわられた後も、南バルカンにおける同価値の銀貨の名称として通用した。Bellinger and Grierson 1999, 27-8.

¹⁶ Strohal 1915, Lib. II, 259-60, cap. 64.

¹⁷ ミラノのアンプロシウス、ヒッポのアウグスティヌス、ヒエロニムス、教皇グレゴリウス1世の4名を指す。教会博士という敬称は、16世紀以降拡張されたが、本来1298年に教皇ボンファティウス8世がこの四人に対するものとして定めたものであった (Sextus liber decretalium, III. tit. XXII, De reliquiis et veneratione sanctorum, Friedberg, *Corpus Iuris Canonici*, II, 1059-60)。

¹⁸ Ivić 2016, 628-9.

¹⁹ 以上二例: Ivić, 632.

→②内外におけるヒエロニウムス崇敬との関係は？

◇「ダルマティア人」とそのアイデンティティーの問題

・「ダルマティア人」：イストリア以南の沿岸部という焦点を持つが、ロマンス語話者のことを指す場合もスラヴ系言語話者を指す場合もあり曖昧。中世においては「クロアチア人」「スラヴォニア人（スラヴ人）」「イリュリア人」（ルネサンス期以降）と相互互換可能な形で用いられる場合も

→他の名称でない「ダルマティア人」の含意は？

①対ヴェネツィア

・支配を受ける/それに対峙する諸都市としての「ダルマティア」（内陸部のクロアチア、スラヴォニアと差異化する機能）。またヴェネツィア以外の外部勢力への対抗にも応用可能？

→1382年の反ヴェネツィア同盟。“*nos omnes civitates Dalmacie*”²⁰。

②「スラヴ人」「イリュリア人」が含みえた正教徒、ムスリムの排除²¹

③市民（civic）アイデンティティーと民族（ethnic）アイデンティティー

→課税・通商特権に直結した形で政体を構成する市民アイデンティティーが優勢ながら、別の基準で維持されていた民族アイデンティティーも²²

☆1446年、バルセロナ市議会に対してラグーザ共和国が、ベネデット・コトルリ（ベンコ・コトルリエヴィチ）を含む同国商人たちがイタリア関税（*Dohana Italiana*）を徴収されたことに抗議した文書で、「（ラグーザ人は）イタリア人ではなく、イタリアに従属したこともなかったし、いやむしろあるいは自らの言語から（*ex suo idiomate*）²³、あるいは位置の観点から（*ex situs ratione*）²⁴、ダルマティア人として、ダルマティア地方（*provincia Dalmatia*）に属するものである」と表明されている

→基準：言語と地域。少なくとも史料は商業の文脈で、「イタリア人」とは別の扱いを要求。大半がヴェネツィアの支配下にある状況ではなおさら

※ドゥブロヴニクでは既に聖ヴラホ（ブラシウス）が遅くとも12世紀以来市の守護聖人として崇敬を集めていた²⁵。「ダルマティア人」ヒエロニウムスへの崇敬が導入されたことは、二つのアイデンティティーに関係する？

④「イタリア人」アイデンティティーへの対抗？

→前述の史料における「イタリア」

→ヒエロニウムス生地論争

²⁰ Gelcich, József, *Thallóczy 1887*, 702. Cf. Fine 2006, 142.

²¹ Kunčević 2010, 161.

²² Kunčević 2010.

²³ この言語が具体的に、ロマンス語系のダルマティア語を指すのか、スラヴ語系のクロアチア語チャ方言諸語を指すのか、必ずしも明らかでない。

²⁴ クンチェヴィチは“*through common territorial context*”と訳す。Kunčević 2010, 160.

²⁵ Nagy 1972.

*イストリア説=イタリア説：内陸の村ズレニ Zrenj (It. Sdrigna) こそがストリドン Stridon であると同定。中世から伝説として存在した(14世紀にも言及がある)がフラヴィオ・ビオンド(1392-1463)やその弟子ヤコーポ・ディ・ベルガモ(1434-1520)が主張。ローマ帝国の行政区分でイストリアはイタリアに含まれていた(後期帝政でもイタリア・アンノナーリア管区に属するウェネティア・ヒストリア属州)ことから、ヒエロニウムスはイタリア人であると主張²⁶。ただしビオンドはヒエロニウムスが聖書のスラヴ語訳とスラヴ語典拠を創始したという伝説を肯定

*ダルマティア説：イストリア説に反駁する形で登場。ストリドンをトロギル、スクラディン近郊に同定。マルコ・マルリッチ(1450-1524)²⁷は『福者ヒエロニウムスがイタリア人であったと主張する者たちへ』(In eos qui beatum Hieronymum Italum fuisse contendunt)という小冊まで著して反論

→知識人たちの、守護聖人を懸けた national pride の発露(Verkholanstev)、「地元」生まれの聖人の崇敬という現象の人文主義的形態(Ivić)

⇒イタリア側から見ると古典復興の余波で起こった副次的論争か。しかしダルマティア側から見ると切実な問題？

・小括：「ダルマティア人」理念が強化される素地。「聖ヒエロニウムスの祝日」が輪郭線と共通意識をより明瞭にした可能性

◇「ヒエロニウムス」崇敬の問題

・14世紀以降イタリアを中心に崇敬が復興。従来の聖書翻訳者に加え……

→苦行者：フランチェスコ会など托鉢修道会 of 精神と共鳴、図像にも

→四大教会博士：教皇ボニファティウスによる「四大ラテン教父」への認定(1298年)²⁸

→奇跡行者：ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』(1259-1266頃)140章におけるヒエロニウムス伝でライオンの逸話などが広まる。14世紀に、クレモナのエウセビオスとヒッポのアウグスティヌスの往復書簡という体裁の偽作『聖ヒエロニウムスの生涯と被遷』(Vita et transitus sancti Hieronymi)の編纂²⁹。死の前後に起きた奇跡を活写

→文章の模範：イタリア・ルネサンス。古典作品の引用や洗練された文体が人気を博す

⇒少なくとも『聖ヒエロニウムスの生涯と被遷』(Vita et Transitus Hieronymi)は1508年にセニ(Senj)でグラゴル文字スラヴ語訳が出版されている

・ドゥブロヴニクとトロギルが制定した法の文言：「生まれ」は含んでも「文字・典礼の制定」「スラヴ語への翻訳」などは含まない。従来の伝説とは一線を画す？

→修道士・宗教的知識人が主たる担い手であった従来の伝説と異なり市民団が担い手。ま

²⁶ Biondo 1542, 196ff.

²⁷ Fine 1998, 105, Verkholanstev 2014, 166-8, Ivić 2016, 621-2.

²⁸ Sextus liber decretalium, III. tit. XXII, De reliquiis et veneratione sanctorum, in: Friedberg 1881, II, 1059-60.

²⁹ Verkholanstev, ibid. 4, Ivić 2020, 127-9.

ずは同時代の典礼などでの崇敬形態を考察する必要

☆聖務日課の分析

⇒フム聖務日課（15世紀、古クロアチア語/クロアチア教会スラヴ語）³⁰の伝記とミラノ・ローマ典礼（1474、ラテン語）³¹の比較

- ・共通：ストリドン生まれ、ローマでの学び、砂漠での生活、ベツレヘムへの移住
- ・差異……

☆フム：ダルマティアやパンノニアの地名が出る、ラテン語への聖書翻訳を語らない、「グレゴリイ・ナウザゼン」（＝ナジアンゾスのグレゴリオス）への師事と聖書解釈の学び、書簡 22.7 から太陽が灼熱し修道士たちにとり全く喜ばしくない環境に過ごしたことが言及される

☆ミラノ：キケロやプラトンへの言及、書簡 22.7 からさそりの環境+娘たち（の幻覚）に耐えたことを言及、死後の幻視に関する長い言及

→フム聖務日課は正教圏で「神を語る者」（テオロゴス）として非常に崇敬されているナジアンゾスのグレゴリオスに言及し、ローマでの学びを「世俗の学問」の一言で片づける。またヒエロニムスの忍耐力に注目。対してミラノ聖務日課はラテン語の教養を重視し、性的克己をより強調

○祝日制定法再訪

- ・模範、教理（ドゥブロヴニク）：従来のヒエロニムス像をさらにマイルドに語る
- ・死後の奇跡（両者）：*Vita et Transitu* の影響
- ・生の過酷さ、聖書釈義（トロギル）：フム聖務日課の関心と類似？
→微妙で興味深い差異はあれど、フム聖務日課にすら典礼・文字を作った逸話は登場しない³²。いずれも諸祝日法の文言に近い

※ただし……フラヴィオ・ビオンドの反応やその後の広まりなどを見ると、13世紀以来の「スラヴ語の擁護者」伝説も相当広まっていたと推定できる

→さらなる発展の余地を残す伝説の上に公式の崇敬……二重状態？

³⁰ Badurina Stipčević 2013, 23 に所載の、『フム聖務日課』（Humski brevijar）に基づく。なおヒエロニムスを記念する9月30日の聖務日課は①賛歌②伝記③ヒエロニムスのエウストキウム宛書簡（書簡 22）からの抜粋（7節）の朗読（『黄金伝説』に引用されるのと同じ範囲）から成っていた。発表者はこのうち最初の賛歌も分析しようと試みたが、グラゴル文字を転写する段階で力尽きたことを告白する。同じ理由によってかどうかは不明だが、Badurina Stipčević も伝記と書簡抜粋の部分しかラテン文字転写を掲載していない。

³¹ Lippe 1907, 241-3. いくつかの祈祷と朗読の間に、二つの *sequentia* が記載されており、前者はより祈り・賛歌に近く、後者は生涯を歌い上げるものとなっている。ここでは後者を取り上げる。

³² ただし、フム聖務日課の賛歌の中に”*ize pisma tvoego n(a)mi tajnaê êvi*“「あなた（神）の秘密の書（文字、手紙）を私たちに明らかにした方」という文言が見いだされる。具体的な限定はないため解釈はどうとでもできるが、スラヴ語への翻訳を強く示唆する文言であるようにも思われる。

・祝日制定法+フム聖務日課。ヒエロニムスの生涯に対する「ダルマティア」的解釈の可能性

→ローマでの学び、枢機卿などは語られる：イタリア他地域でなくローマの逸話。教皇の権威は比較的安全？

→聖書：対立を招きかねない「〇〇語」への翻訳を語らず、釈義にとどめる

→言語学習、翻訳：ヘブライ語の影の薄さ（現代ではむしろ最も注目される要素の一つ）。教皇庁や後背地、ビザンツ帝国などとの交渉？ ダルマティア人、たとえばラグーザ人イヴァン・ストイコヴィチ（1400年頃-1444）がスラヴ系言語能力を活用しつつ教皇庁で出世例³³。ダルマティア人としてのロールモデル？

→過酷な苦行：相対的に貧しいダルマティアや、あるいは同時代の托鉢修道会と重ね合わせる？

→ラテン語に関する要素の不在（⇔イタリア・ルネサンス的受容）

・漸進的なイメージの変容や、細微な強調点の違いの中で際立つ「ダルマティア人」アイデンティティー。祝日法における生まれ（*natio*）への焦点移動は偶然ではない。近隣地域でも崇敬されている聖人に、地方色の強い伝承を直接まとうせることなく、「ダルマティア人」に受け入れられやすい仕方で占有することでそのアイデンティティーを強化、生き残りのための一手

○文献一覧（史料）

Bellinger, R. and Grierson, Philip (eds.). 1999. *Catalogue of the Byzantine coins in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection, Volume 5: Micael VIII-Constantine XI: 1258-1453, part 1*. Washington D. C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Biondo, Flavio. *Roma ristavrata et Italia illustrata*. Venezia, 1542

de Capmany y de Montpalau, Antonio. 1779-1792. *Memorias historicas sobre la marina comercio y artes de la antigua ciudad de Barcelona*. 2 tomos. Madrid : En la imprenta de D. Antonio de Sancha.

Friedberg, Emil (hrsg.). 1879-81. *Corpus Iuris Canonici*, 2 Bde. Leipzig: Bernhard Tauchnitz.

Lippe, Robert. 1907. *Missale romanum Mediolani, 1474*. Vol. II. London: Harrison and Sons.

Nedeljković, Branislav M. 1984. *Liber Viridis*. Beograd: Srpska akademija nauka i

³³ ラグーザのヨハネス、ヨハネス・デ・スタイイスとも。ドミニコ会に入ってソルボンヌで学んだあと、教皇庁で働きバーゼル公会議（1431）でフス派とスラヴ語で討論する、ラグーザのために商業特権を認めさせるなど活躍、その全権大使としてビザンツに赴き教会合同の交渉。ブルガリア出身の総主教イオシフ（ヨセフォス）2世ともスラヴ語で議論したと伝えられる。枢機卿に選出されるが若くして亡くなった。クレキッチ 1990, 123 頁。

umetnosti.

Strohal, Ivan. 1915. *Statutum et reformationes civitatis Tragurii. = Statut i reformacije grada Trogira*. Monumenta historico-juridica Slavorum meridionalium. 10. Zagreb: Na prodaji u knjiari Jugoslavenske akademije.

Theiner, Augustin. 1863. *Vetera monumenta slavorum meridionalium: historiam illustrantia. Maximam partem mundum edita ex tabulariis Vaticanis, t. I*. Roma: Typis Vaticanis.

Watterich, Johann Matthias. 1862. *Pontificum romanorum qui fuerunt inde ab execunte saeculo IX usque ad finem saeculi XIII vitae: pars IV (cont.)-VI. Paschalis II-Coelestinus III. 1099-1198*. Lipsiae: sumptibus Guilhelmi Engelmanni.

○文献一覧（文献）

Badurina Stipčević, Vesna. 2013. Legenda o Jeronimu u starijoj hrvatskoj književnoj tradiciji [The Legend of Jerome in the older Croatian literary tradition]. *Wiener Slawistischer Almanach* 85, 17–26.

Badurina Stipčević, Vesna. 2015. Legenda o svetom Jeronimu u hrvatskoglagoljskom *Petrisovu zborniku* (1468.) [The Legend of Saint Jerome in the Croatian-Glagolitic *Petris-collection* (1468)]. *Zavod za hrvatsku povijest* 47, 337-50.

Dobronić, L. 2003. Templari u Senju, *Senjski zbornik*, 30 (1), 191-200.

Dzino, Danijel. 2010. *Becoming slav, Becoming Croat: Identity Transformations in Post-Roman and Early Medieval Dalmatia*. Leiden, Brill.

Fine, John V. A. Jr. 1991. *The Early Medieval Balkans: A Critical Survey from the Sixth to the Late Twelfth Century*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Fine, John V. A. Jr. 1998. "The Slavic Saint Jerome: An Entertainment," in Z. Gitelman, L. Hajda, J.-P. Himka, & R. Solchanyk (eds.), *Cultures and Nations of Central and Eastern Europe: Essays in Honor of Roman Szporluk*, special issue, *Harvard Ukrainian Studies* 22, 101–12.

Fine, John V. A. Jr. 2006. *When Ethnicity Did Not Matter in the Balkans: A Study of Identity in Pre-Nationalist Croatia, Dalmatia, and Slavonia in the Medieval and Early-Modern Periods*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Fine, John V. A. Jr. 2010. *When Ethnicity Did Not Matter in the Balkans: A Study of Identity in Pre-Nationalist Croatia, Dalmatia, and Slavonia in the Medieval and Early-Modern Periods*, University of Michigan Press.

Gelcich, József, Thallóczy Lajos. 1887. *Raguza és Magyarország összeköttetéseinek oklevéltára [Diplomatarium relationum reipublicae Ragusanae cum regno Hungariae]*. Budapest: Tud. Akadémia.

- Glavičić, M. 2014. Pismo pape Inocenta IV. Senjskom biskupu Filipu u tiskanim izdanjima i historiografiji [The Epistle of the Pope Innocent IV to Philip, the bishop of Senj in its printed editions and historiography]. *Senjski zbornik*, 41 (1), 159-183.
- Gracia, Susana Lozano. 2012. *Las élites en la ciudad de Zaragoza a mediados del siglo XV: La aplicación del método prosopográfico en el estudio de la sociedad*, 128.
- Ivić, Ines. 2016. "Jerome Comes Home: The Cult of Saint Jerome in Late Medieval Dalmatia". *Hungarian Historical Review* 5, no. 3., 618–644.
- Ivić, Ines. 2018. "The "Making" of a National Saint: Reflections on the Formation of the Cult of Saint Jerome in the Eastern Adriatic". in: Giuseppe Capriotti, Francesca Coltrinari and Jasenka Gudelj (eds.), *Visualizing Past in a Foreign Country: Schiavoni/Illyrian Confraternities and Colleges in Early Modern Italy in comparative perspective*. Il capitale culturale: Studies on the Value of Cultural Heritage Supplementi 07. online: eum edizioni università di macerata, Centro direzionale (editor).
[https://www.academia.edu/36507782/Visualizing Past in a Foreign Country Schiavoni Illyrian Confraternities and Colleges in Early Modern Italy in comparative perspective](https://www.academia.edu/36507782/Visualizing_Past_in_a_Foreign_Country_Schiavoni_Illyrian_Confraternities_and_Colleges_in_Early_Modern_Italy_in_comparative_perspective)
- Ivić, Ines. 2020. "Circulation of Vita et Transitus Sancti Hieronymi along the Eastern Adriatic Coast in the Late Middle Ages: = Prisotnost Vita et Transitus Sancti Hieronymi vzdolž vzhodne jadranske obale v poznem srednjem veku". *Edinost in dialog*, 75 (1), 125-139.
- Jovanović, Neven. 2017. "Classical Reception: An Introduction". in: Zara Martirosova Torlone, Dana LaCourse Munteanu and Dorota Dutsch (eds.), *A Handbook to Classical Reception in Eastern and Central Europe*. Oxford: Wiley Brackwell, 15-20.
- Kunčević, Lovro. 2010. "Chapter Four. Civic And Ethnic Discourses Of Identity In A City-State Context: The Case Of Renaissance Ragusa". In: *Whose Love of Which Country?*, Leiden: Brill.
- Luzzati, Michele. 1984. "COTRUGLI, Benedetto". in: *Dizionario Biografico degli Italiani*. Volume 30, Roma : Istituto della Enciclopedia italiana.
- Nagy, Josip. 1972. Sveti Vlaho zaštitnik Dubrovnika: U provodu 1000. Obljetnice njegove zaštite. *Crkva u svijetu*, 7 (3), 256-270.
- Rapanić, Željko. 1986. s. v. „Dalmatien“. in: Lexikon des Mittelalters. Bd. 3. München & Zürich, Artemis-Verlag, 444-57.
- Šanjek, Franjo i Josip Tandarić. 1984. Juraj iz Slavonije (oko 1355/60-1416.): profesor Sorbonne i pisac, kanonik i penitencijar stolne crkve u Toursu. *Croatica Christiana periodica*, 8 (13), 1-23.

Šimić, Ana and Vela, Jozo. 2021. From Little Chapters to the Big Questions: How Were the Croatian Glagolitic Breviaries and Missals Compiled?. *Slovo*, 71 (1), 121-168.

Verkholanstev, Julia. 2014. *The Slavic Letters of St. Jerome: The History of the Legend and Its Legacy, or; How the Translator of the Vulgate Became an Apostle of the Slavs*. DeKalb, Illinois: Northern Illinois University Press.

Vuletić, Nikola. 2018. "Croatian in the Mediterranean Context: Language Contacts in the Early Modern Croatian Lexicography." *Lexicographica*, 33, 69–93.

石川達夫, 2021. 『チェコ・ゴシックの輝き：ペストの闇から生まれた中世の光』成文社.

ヴァグナー, アレッサンドロ, 2021. 『世界初のビジネス書：15世紀イタリア商人ベネデット：コトルリ 15の黄金則』伊藤博明訳, すばる舎.

大黒俊二, 1985. 「ラグーザの人、ベネデット・コトルリ——生涯と作品——」『人文研究』第37号第9分冊,

——, 1987. 「コトルリ・ペリ・サヴァリー「完全なる商人」理念の系譜——」『イタリア学会誌』第37号、57-75頁.

小澤実ら編, 2009. 『ヨーロッパの中世3 辺境のダイナミズム』岩波書店.

木村彰一, 1985. 『古代教会スラヴ語入門』白水社.

柴宜弘, 2021. 『ユーゴスラヴィア現代史 新版』岩波新書.

中平希, 2018. 『ヴェネツィアの歴史：海と陸の共和国』創元社.

クレキッチ, B., 1990. 『中世都市ドゥブロヴニク：アドリア海の東西交易』田中一生訳, 彩流社.

加藤哲平, 2017. 『ヒエロニムスの聖書翻訳』教文館.

金原由紀子, 2013. 「ジョヴァンニ・デル・ビオンドの《玉座の聖ゼノビウス》をめぐる一考察：共和制フィレンツェの守護者としての聖人像」『尚美学園大学総合政策研究紀要』22/23, 91-106.

藤崎衛（監修）, 内川勇太ほか訳, 2015. 「第四ラテラノ公会議(1215年)決議文翻訳」『クリオ』29, 87-130.

森安達也, 1978. 『キリスト教史 III』山川出版社.



12-15世紀のダルマティア
およびその沿岸地域

- 【凡例】
- ・ラグーザ共和国 (50 pt.) : 独立勢力
 - ・(コサチャ朝) (35/30 pt.) : 支配王朝
 - ・Dubrovnik (以下30 pt.) : 現地語都市名(クロアチア語、ハンガリー語、スロヴェニア語、アルバニア語など)
 - ・ドゥブロヴニク: 現地語のカタカナ表記
 - ・Ragusa: イタリア語都市名 *Ragusium*: ラテン語都市名